星　第三話　蛇の説教

ユキアネサ

一

あれから数日が経ち、カサインはいつものように食糧を届けていたが、最後に「ありがとう！　泣き虫博士！」と元気よく子供に言われた。

泣き虫博士。これがカサインのあだ名として広まった。けれど、不思議と嫌な感じはしなかった。天文台にいた頃は、心に潜む影が決してこんなことは許さなかったが、あの夜、あの泣いた夜を経て心が軽くなった気がした。

食料を配り終え、いつもの小屋で昼寝をしていたが、周りが騒がしくなって目が覚めた。小屋から出て、外を見ると、道に大きな人だかりが出来ていた。気になったのでカサインも群がりに加わったが、その景色を見て驚いた。中心にいたのは首に蛇を巻き付けた老人だったが、村の住人は〈アトル期〉に入るはずなので老人の姿まで成長するのはおかしい。体は痩せこけ、至る所に本来皮下にあるはずの腱が浮き出ていた。極限までそぎ落とした肉と脂肪は、あらゆる所有を放棄した死体を印象付けた。

しかし顔の印象は違った。その思慮深く柔和な眼窩を携えた顔付きは、むしろ、真の豊かさは物の所有ではなく、物に触れ合う時の感性であると言わんばかりの豊饒さを備えていた。

首に蛇を巻き付けた老人は徐々にこちらに近づき、遂にカサインの目の前まで来た。その時だった、カサインは頭を下げなければいけないと強く感じた。お辞儀をしなくては……。自分の中にあり、カサインを制御するカサインを超えたところにある何かが彼にお辞儀をさせた。

老人は立ち止まり、言葉を発した。

「少年よ、顔を上げなさい。どうして頭を下げるのか」

「俺の故郷では、その……、何というか……年上を敬う習わしがあるのです……」

老人の首元の蛇がシューシューと音を立て、舌を動かした。その蛇はカサインのあり方に反応しているようだった。

「少年よ、なぜ長寿だから敬うのか。彼の齢が老けたのみで、いたずらに歳を重ねた者もいる。それは敬うに値するだろうか。崇める理由は汝の外ではなく、内にあるものだ」

カサインはそんなことは考えたこともなかったので、唖然とした。

老人の目が、カサインの全存在を見抜いているように感じて、居心地が悪かった。カサインのある部分はこの老人に反発し、嫌っていた。しかし他の部分ではこの老人に救いを求めていた。彼は必死に考えた結果、この人に教えを頂こうと決めた。

――この人の元でなら、色づいた生を取り戻せるかもしれない。『欲を離れ、また欲を離れず』という遺宝の意味が分かるかもしれない。

「どうか名前を教えて下さい」

カサインは言った。

「我が名はナーガアートマ。人は我を森の聖者と呼ぶ」

二

老人は森に帰ったが、しばらくは村の近くにいると言

っていたので、カサインは歩いて行くことにした。
森の中は、村とは異なった雰囲気が漂っていた。道らしい道はなく、人を迷わせる迷宮のようだ。原始、おそらく〈星の大災害〉の直後からこの姿のままなのだろう。植物はその生命の奔流のままに精一杯に生き、その様は一枚一枚色が少しずつ違う葉に如実に表れていた。キャラバン隊にいた時に借りた服を着ていたカサインは、森の中で場違いに見え、植物は彼の弱弱しい生命力に困惑しているようだった。この森の生き物は皆、自分のことだけ考えて脇目も振らず生きていたが、カサインは自分の外、本来の自己ではないものの為に生きることに慣れており、自分が異質に感じられた。
深い密林を抜けた先に、少し開けた場所があった。そこに老人はいた。足をあぐらのように組み、背筋をいっぱいに伸ばし、両手の甲を膝に軽く乗せ、全身は脱力していた。肩に止まっている小鳥たちは、まったく警戒せずに、老人を木か何かと勘違いしているようだった。
カサインはどう話かけたら良いか分からなかったので、少し離れた場所にそっと座ったが、驚いた小鳥たちが慌てて飛んでいってしまったので、老人が目を開けないか横目でこっそり確認していた。しかし老人には何の変化もなかったので、カサインも瞑想をすることにした。
ややあって老人が話しかけてきた。
「汝はなぜここに来た？　汝は何を望むのか？　」
「分からない・・・分からないけど、たぶん俺は生きたいのだと思う」
「汝、苦しみの中にいることを知らず、苦しみの理由を知らず、苦を滅するに能うことも、その方法も知らない。苦は言葉である。汝の生は言葉に囚われている。よろしい、学びなさい。そして言葉を取り除きなさい」
それからカサインは暇さえあれば老人のもとに通うようになった。そしてその度に教えを受けた。
ある時、共に瞑想していると急に雨が降り出した。カサインは雨のせいで集中できなくなったので目を開けると、隣の老人を見てひどく驚いた。老人の上には、彼を濡らすまいと傘のように頭を広げ鎌首をもたげている大きな蛇がいた。カサインの叫び声に気付いた老人はこう言った。
「この蛇とは長い付き合いでな。天気が悪くなるとこうして守ってくれる」
カサインがびしょ濡れで凍えているのを見て、老人は蛇に、カサインのほうへ行くように命じた。そうすると、大きな蛇はカサインに七回も体を巻き付けた後、頭上に大きく頭を広げた。カサインは体も心も冷え切り、生きた心地がしなかった。
「うむ、良い機会だから今日は蛇の話をしよう。古来、蛇の狡知の所為で人々は楽園から追放されたというが、それは違う。蛇は我らを救ったのだ。そして蛇だけが真の智慧を持つ。我は蛇に感謝しなければならぬ。年経る蛇のおかげで混沌の地に追放されたのだから。かの楽園では我らの智慧はもろく、自らの楽園を作ることは出来なかった。だが、ここでは、この混沌の大地では、徐々にではあるが善悪の判断を繰り返して、偶像と十字架を重ねて、自らの楽園を作れる。楽園とは帰るための望郷の場ではなく、自らの判断と責任をよりどころに創造するものである。」
「確かあの村では蛇を祭っておるな。もうすぐ、〈蛇還祭〉があるはずだ。彼らは、蛇から生まれたと信じ、蛇の生命と知恵を讃えて、祭りをするのだ」
カサインには思い当たる節があり、確かに最近、村人が忙しく準備をしていることを思い出した。老人は話を続ける。
「とにかく彼らも彼らなりに考えて、蛇を敬うと決めたのだ。さて、お前の蛇はまだ生きているか？　」
「俺は……分からない……。まだ分かりません」
「そうだな。まだ時間は潤沢にある。ゆっくり悩みなさい」

三

時は少し遡る。その頃からだった、シオンの視線を感じるようになったのは。蛇還祭の準備の合間を縫って、シオンはよくカサインに話しかけた。カサインは話かけられる度に怖くなった。カサインの自我は、天文台の数多の競争と比較で傷だらけだった。『天文台の学徒でない自分に価値はあるのだろうか？』とカサインは言ったが、より正確には『自分に価値はあるのだろうか？』が彼を苦しめている悩みだった。天文台では、価値は外から与えられるもので、それを受けるのも限られた少数だった。
シオンの声は彼の心を苦しめた。天文台という支えなしで、自分の行動に責任を取れなかった。失敗するのが怖くて、他者を受け入れるための試行錯誤が出来なかった。
ある日、村を歩いているとシオンに出くわした。そこは広場で、祭りのための道具が一時的に置かれている場所であり、祭りで燃やすために捕まえた蛇の死体が積み重なっていた。
「ねぇ、これから今度祭りがあるんだけど、一緒に踊ら

ない？」
「え？　なんで俺なんかを急に……」
「もっとカサインの話を聞きたいと思ったの。ねぇ、行こうよ？」
カサインのねじ曲がった自我は、他人に触れ合うことを恐れ、他人に自我を見られたくなかった。価値のない醜態をこれ以上暴かれたくなかった。
「ごめん、ちょっと考えさせて」
そう言ってカサインは小屋の方に向かった。
「え？　なんで考える必要があるの？　ねぇ！」
後ろから声が聞こえていた。

考えるは嘘だ。逃げるための嘘だ。蛇の死体が、責めるようにカサインを見つめていた。
――ああ、俺にもっと価値があれば、もっと周りからの承認があれば、自分に自信が持てるのに。

しかし人が「もっともっと」、と望む時、それは人が価値から離れる時である。

四

老人は、カサインの胸のヒメユリを見ていた。カサインの心臓に根を下ろし、生を吸って輝いているヒメユリを悲しげに見ていた。
「その花、魔法で枯れないようになっているな。なるほど、であればそれは天文台のものだな」
カサインは驚いた。なぜこの老人は天文台を知っているのか。
「気になるか？　では話そう。其の実、我は天文台の学徒であった。まだアンブロシウス先生が学長の時だ。二千年も前だがな。先生は自らの死期を悟り、約束を果たすために濃霧の中に入って行かれた。我はその後を追い、何層もの霧を超えた。そして影と対峙したが、我は負けて、彷徨い、気が付いたらこの村に倒れていた。汝もあの霧を越えてきたのだろう。そしてまた霧の中に入ろうとしている。醜い炎に身を任せこの星の中心に向かうだろう。」
「どうしてそれを……」
「汝はこの村を恐れている、村人との接触を恐れている。だから逃げる。一度目の濃霧はなんとか切り抜けたようだが、二度目はそう上手くいくまい。汝を待ち受けるは影。人に植え付けられた太古の害毒。それを破壊してはじめて核へ辿り着く。楽園へ辿り着く。おお、少年よ、別れの時は近い」

五

〈蛇還祭〉は夜に催された。大きく燃え上がる火を囲って、村人は踊る。その火が燃やすのは蛇の死体。蛇の生命力は煙となって村人に入り、彼らに新たな命を授ける。
激しく、そして楽しく触れ合う村人の影をカサインは一人で座って見ていた。自分の影は、触れ合いが怖くて孤独だった。
その時、誰かがカサインの腕を掴んだ。それはシオンだった。カサインは怯えたように女を見る。女は明らかに慰めを求めていた。魂の交流を求めていた。手は徐々にカサインの体を求め、指先には恍惚さと妖艶さが宿っていた。けれど、カサインはそれが怖くて堪らず、その女の手を振り払って逃げるように森へ向かった。
この土地ならなんとか変われると思ったがダメだった。結局、土地が変わってもカサインは変われなかった。重要なのは場所ではなく、心の在り方だっただ。カサインは生い茂る草本を、寸刻の触れ合いも許さないほど急いで掻き分けて走った。目的地に着いた時、老人は普段のように瞑想をしていた。
「ナーガアートマ、俺は行きます。さようなら」
老人はその日はじめての開眼をした。
「潮時か。では心して聞け。汝にこの言葉を託そう。汝の旅の成功を願って。無論、これも言葉であるから、汝の生を縛るかもしれん。だが、この言葉なくして向こう岸には行けない。だからこれは筏だ。向こうに着くまでは重宝して良いが、渡りきってしまったなら捨てなさい」
そう言うと老人は三回同じ言葉を唱えた。

「我はこれに非ず
我はこれに非ず
我はこれに非ず」

「これは先生が、苦難の旅路の前に授けてくれた祈りである。〈アンブロシウスの祈り〉である」
「そして最後に、我が真名はジーヴァン。汝と同じ影に蝕まれ、対峙し、敗北した者である。だがこれは我の生き方。我の道である。汝は汝の道を進みなさい」
「はい。では、さようなら。あなたと過ごした陽だまりは永久にこの胸にあるでしょう」

カサインは背を向けて歩き出した。少し進んでから後

ろを振り返ると老人は既に瞑想していた。一糸乱れぬ呼吸、微動だにしない身体。老人を邪魔する者はなく、周りには調和が満ちていた。青みがかった夜空に照らされた老人は青白く光り、この世の者ではない、死者のような印象がする。しかしそれはカサインの死とは異なる。カサインの死は、執着に目が眩み本来の生命を発揮できない類であるが、老人のそれはあらゆる執着を脱した末に行きつく甘露の境地である。老人は生にさえ執着がなかった。

――ああ、天文台からでもこんなに美しい男が生まれるのか。

そう思いながら、カサインは背を向けて歩き出した。

夜空には〈祈り〉に反発するように八つの星と十二の星座が忌まわしげに浮かんでいた。

つづく